

2021. 1. 3. 降誕節第2主日礼拝式説教

ルカによる福音書講解説教

聖書：ルカによる福音書16章14-18節

『福音は告げ知らされる』

今日の聖書箇所にはファリサイ派の人々が登場します。今日の聖書箇所の前
のところで主イエスは弟子たちに向かって話をしていました。その話の一部始
終をファリサイ派の人々は聞いていたというのですから、主は外で、弟子たち
に語っておられた。そしてファリサイ派の人々は、その話を聞いて主イエスを
あざ笑った、ということから今日の話は始まっています。ファリサイ派につい
ては、すでに皆さんもいろいろ知っておられると思いますが、ユダヤ教の中の
大きな勢力であったことは確かで、ユダヤ教正統派を自任する、宗教的なグル
ープ、セクトでした。彼らは律法の厳格な順守を基本とし、律法を学び研究し、
律法だけでなくユダヤの宗教的な言い伝え、口伝も大切にしていました。福音
書の書かれたころは、ファリサイ派の多くは富裕層の人々でした。

彼らが主イエスの話をあざ笑ったのは、大きく二つの理由があったと思われ
ます。一つは、主イエスの語ったたとえに対して。不正な管理人のたとえその
ものに対する嘲笑。もう一つは、主イエスが最後に言った言葉、二人の主人に
仕えることはできない。あなた方は神と富とに仕えることはできない、に対す
るあざ笑いでした。

最初の、たとえそのものに対する嘲笑は今置くとして、二つ目の神と富とに
仕えることはできない、をあざ笑ったのは彼らすれば当然すぎるほどのことで
した。

なぜなら、ファリサイ派の人々は、ほかのユダヤ人よりの誰よりも律法を守
り神に仕え、かつ経済的な豊かであったからです。律法を守り神に仕えること
は、神の祝福を受けること、それはこの人生で様々な祝福を受けること、人生
がうまくいき、経済的にも充たされ、充実していく、彼らはそう受けとめてい
ました。また旧約聖書もそのように読んでいました。一生懸命信仰生活を守る、
それは必ず神の祝福を受けてこの世的にも豊かになる、という考え方です。現
代でもそういう考え方は様々な形でありますし、どこでも普通に聞く話です。

ところが主イエスの語ったことは違いました。神と富とに仕えることはできない、つまりどちら一つにしか仕えることはできない、というのです。

これはファリサイ派からすれば、あざ笑うべき言葉だったのです。もちろんファリサイ派の人々は、神に仕えるように、富に仕える、と同列になど考えていなかったでしょう。神には仕える、富は必要なもの、というような棲み分けをしていたと思います。ところがキリストの言葉は、まるで二者択一のようにも聞こえるのです。

神に仕えるか、富に仕えるか、と。

ルカによる福音書の著者は「金に執着するファリサイ派の人々が」と書き出しています。「金に執着する」という言葉はすでにファリサイ派に対するよくないイメージがこびりついていますが、金の好きな、金銭好みのという言葉です。誰だってお金は嫌いではない。そもそも生きることはお金抜きには考えられない。金銭好みと言って、守銭奴になる人ばかりでもない。生きるために必要だから金銭好み、ということでもあるでしょう。

さらに、15 節にある主の言葉「あなたたちは人に自分の正しさを見せびらかすが、神はあなたたちの心をご存じである」という言葉は、通りすごしてしまう人もいるかもしれませんが、誰の中にもあるものです。自分の正しさを見せびらかす、ということはなくとも、自分を正当化するということは、小さな子どもですることです。自分はこれには関係ないとか、自分はそれに加担していないとか、僕は悪くない、というあれです。それはわたしたちの日常に普通にあることで、自分の中に、根深くあるものです。自分の正しさを見せびらかす、そんなことを自分はしない、と思っている人でも、自分を正当化するということは、無縁ではないはずで

金銭好みと言い、自己正当化と言い、これはファリサイ派の人々という特別な人たちの特殊なことなのではないでしょう。自分の中にあること、ということとはわかるはずで

そうであれば、この後で語られる「人に尊ばれるものは、神に忌み嫌われるものだ」という主イエスの言葉が深く突き刺さってくるのです。

ファリサイ派の人々というのは、福音書に記されているように、しばしば主イエス・キリストを攻撃した人たちです。無視した人たちではない。躍起にな

って攻撃した人たちです。主イエスとその弟子たちが律法の教えるようには断食しない、と言っては攻撃し、安息日にはいけないことをする、と言っては攻撃したのです。なぜ、そんなことをしたのか。富裕層の彼らから見れば、主イエスや弟子たちなど、放っておけばいいはずです。しかし彼らは攻撃した。それは彼らの真面目さからくるものでもありました。律法を厳守する彼らから見て、イエスと弟子たちは、批難の対象だったのでしょう。

しかし主イエス・キリストの視線は違っていました。それは、ファリサイ派がどれだけ律法を忠実に守っているか、律法にあらわされている神の言葉を守ろうとしているか、ということに留まることではない視線でした。

それは律法を守るその先、ということです。神と富とに仕えることはできない、13節に出てきましたが、その場合の仕えるとは、礼拝ということにつながっていく言葉です。律法を守ること、神に仕えること、それは神を礼拝することにつながっていくのですが、主イエスはどこを向いて神を礼拝していくのか、とファリサイ派に問いかけたといってもいい。いやファリサイ派だけではない弟子たち、わたしたちに向って、礼拝するのは何のためなのか、とここで問いかけておられるのです。

たとえば、ファリサイ派の人々の中には、神を礼拝することが実際のところ『自己実現』にほかならない、という人が多くいたと思います。もちろん当時は自己実現などという言葉はなかった。しかし実態としてはそうだった。ユダヤ人として誇り、神を知ることにより良い自分の在り方を知り、少しでもまともな正しい自分になり、神の祝福を受ける。そしてこの世的にも充たされ、豊かになり、人々の称賛や評価を受ける。そして満たされた思いで死んでいく。

礼拝することで、自分が豊かで満たされた自分になり、自己実現していき、満ち足りた人生を送る。いい言葉がたくさん出てくるようですが、要するに自分のためです。礼拝は自分のため。信仰的満足を得て、富を得て、豊かになり、自分を正当化できるようになっていく、それは全部自分のため。礼拝をしている自分、安息日を厳守している自分に満足して行く、とにかく自分が最終の目的になっていくのです。

主イエスは、ファリサイ派の人々を見ていて、そのことを感じていたのでしょう。神を礼拝することすなわち神に仕えることが、自分に仕えていくことになってしまっている。そうであるなら、どんなに律法を厳格に守っていても、

安息日を守っていても、その最終ゴールは、神ではなく自分。

しかし、神を礼拝する目的は、神をほめたたえ、神の栄光をたたえ、神の器とされていくこと、つまり自己目的とは全く正反対の、神目的とされていくことです。神に仕えることです。主がここで言われる「人に尊ばれるもの」とは、自分目的、人間目的なもののことでしょう。神に仕えると言いながら、自分目的になってしまう。富とはここでは自分が豊かになること、自分目的と言い換えてもいいことです。

主イエスはファリサイ派の人々の信仰熱心の中に、自分目的の偽善を見ておられたのです。信仰の中にも自分目的が現れる、そしてそれがいつの間にか中心になっていく。それは神の前で忌み嫌われるものだというのです。わたしたちの胸にも深く突き刺さってきます。

しかし今や、福音が告げ知らされる。神の福音、神の恵み、神の救い、イエス・キリストがこの世に來りて、福音が告知される。このイエス・キリスト、福音との出会いこそ、人間が転換していく出会いなのです。自分目的、自己目的で歩んでいる人間が、キリストに愛され、キリストによって救われることで、人が生きる目的が変えられていくのです。方向が変えられていくのです。神目的に変えられていく。キリスト教信仰とは、この方向の転換に他ならない。そして、律法とはもともと方向が転換したものに示されていく神の掟なのです。新しい一年、キリストと出会い、キリストによって生きる方向を転換させられて、そこに向かって歩いていきたいと思うのです。